

# 岸和田だんぢり祭序説

石田信博

一

大阪府岸和田市。大阪湾南部に面するこの都市は、江戸時代には岡部氏五万石の城下町として栄え、明治以降も繊維産業や機械工業の発達とともに発展してきた。平成一四年の人口は約二〇万二千人で、大阪南部では堺市に次ぐ都市として、近隣地域の中核都市的役割を果たしている。

岸和田市で毎年秋に行われる「だんぢり祭」は全国的に有名である。だんぢり祭は、大阪湾沿岸の旧市街地域では九月一四日、一五日に、また市内東部地域では一〇月の第二土曜日、日曜日に行われる。岸和田と同様のだんぢり祭は大阪南部の多くの地域でも一〇月に行われて

いるが、マスコミにも取り上げられて注目を浴びているのは、岸和田旧市街地域のだんぢり祭である。

岸和田のだんぢり祭は、一台あたり百人を超える曳き手によって旧城下町の狭い道路を曳き回されるだんぢり（地車）が激しい動きをすることから、勇壮な祭として知られている。一方、その激しさのあまり時には勢い余っただんぢりが建物に激突し、物損事故や人身事故も起きる危険な一面を併せもつともいわれている。

しかしながら、そのような印象とは異なり、木製のだんぢり本体には精巧で繊細ともいえる彫物（彫刻）が施されている。また、だんぢり祭を全体的に運営する組織の構成は合理的で、古くからの伝統に現代的な新しさを適度に加えた運営を常に行ってきた。

岸和田のだんぢり祭について記された書物は多数ある。それらは郷



土史研究者やだんぢり祭愛好者の著したものである。また、『岸和田市史』にもだんぢり祭に関する詳細な記述がある。(その一部は参考文献欄を参照。)

筆者はだんぢり祭の研究者ではない。しかし、だんぢりの曳き手のひとりとしてだんぢりの操作に長年携わってきた。また、だんぢり祭の運営組織にもかかわっている。本稿は、だんぢり祭に深くかかわる者の観点からだんぢり祭の側面について記すものである。

## 二

岸和田のだんぢり祭は、元禄一六年(一七〇三)九月二十七日に岸和田藩主岡部長泰が京都伏見から稲荷を岸和田城内三の丸に勧請し、五穀豊穡を祈った稲荷祭がその始まりであるといわれている。稲荷祭で人々はだんぢりを曳いて町を練り歩いた。初期のだんぢりは長持のような箱形のものに車輪をつけ、その上に人や風景などを模して作られた飾り物を載せて、それを綱で曳いたものであろうといわれている。(岸和田だんぢり祭の歴史について詳しくは、『岸和田市史』を参照。)

現在では、旧市街地域のだんぢり祭は九月一四日と一五日の二日間に行われている。一四日は宵宮、一五日は本宮である。一四日は午前六時から午後一〇時まで、一五日は午前九時から午後一〇時まで、だんぢりを曳行する。一五日の午前中には、氏神にあたる神社にだんぢりが宮入する。二日間とも昼間は勇壮で激しい曳行が繰り広

げられる。対照的に、夜間は多数の提灯を飾り付けられただんぢりがゆつくりと曳かれ、幻想的ともいえる情況をつくりだしている。この二日間以外に、九月の第一日曜日（第一日曜が一日の年は八日）と一三日にそれぞれ二時間、だんぢりの動きを確かめ、曳き手の呼吸を合わせるための試験曳が本番と同様に行われる。だんぢりの曳行は町会（自治会）単位で行われる。すなわち、各町会が一台ずつのだんぢりを所有し、曳行する。旧市街地域には、だんぢりが三五台ある。そのうち、岸城神社に宮入するだんぢりは、宮本町、上町、五軒屋町、北町、堺町、本町、南町、大北町、中北町、大手町、紙屋町、中町、中之濱町、大工町、南上町の一五台、岸和田天神宮に宮入するだんぢりは、沼町、筋海町、別所町、藤井町、並松町、下野町の六台、弥栄神社に宮入するだんぢりは、春木南、春木本町、春木大小路町、春木中町、春木若松町、春木旭町、春木宮川町、春木宮本町、春木大國町、八幡町、戎町、松風町、大道町、磯之上の一四台である。（だんぢりを所有しない町会もある。また、一台のだんぢりを複数の町会で曳行するところもある。）

だんぢりは各町会の人々が中心になって曳行されるが、近年ではそれぞれ町会に所属していない人、すなわち他地域に住む人も多数参加している。また、だんぢりが曳行されるコースは、かつては旧街道や市街地の狭い道路が中心であったが、現在では市内の大通りや幹線道路の一部でも曳行されている。マスコミなどで取り上げられて有名になったことで、見物人の数も多くなっている。平成一四年の見物

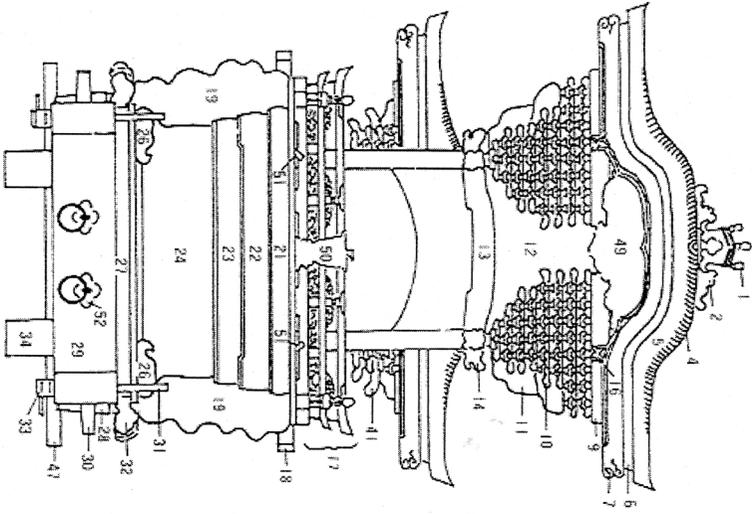
人数は、二日間合わせて六一万人（岸和田警察署の発表による）であった。最近では、有料の観覧席まで設けられている。

### 三

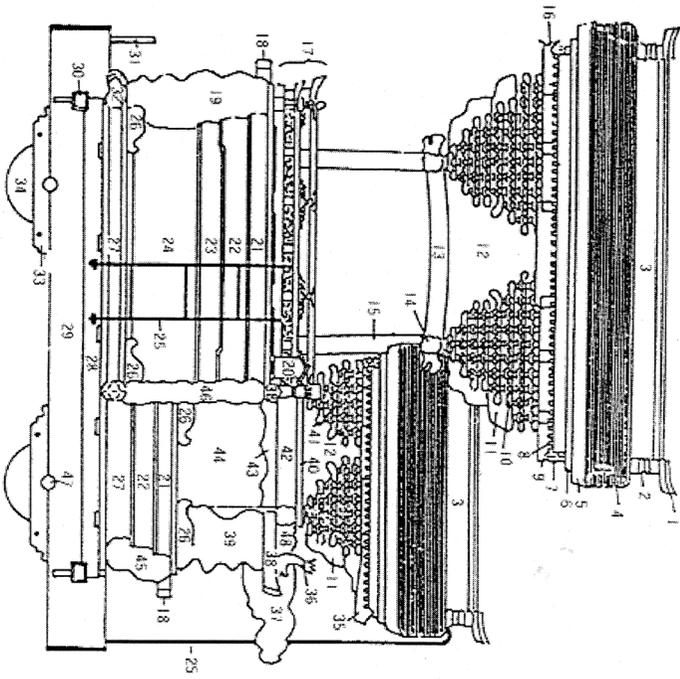
だんぢりの本体はすべて木製で材料は櫨が使われている。その基本的な構造は、台とよばれる木枠の上に四本の柱（舞台柱）をたて、その上に屋根（大屋根）が取り付けられている。（資料1を参照）舞台柱の下半分の前と左右には、土呂幕、大連子、小連子、松良といった部分を中心に精巧な彫物（彫刻）が施されている。同様に、大屋根の周囲にも、枘組や枘合を中心に彫物が施されている。舞台柱の後には小屋根があり、その下の見送や大脇などにもやはり精巧な彫物が施されている。台の内側には四つの木製の車輪が取り付けられている。台の前にある曳綱環に曳綱を取り付けて、それを曳くことによりだんぢりは動く。だんぢりの進む方向を変える場合は、台の後に取り付けられる約三〇〇センチメートルの後挺子を三〇人程の担当者が力を合わせて左右に振ることによって向きが変えられる。だんぢりを急停止させる場合は、前の左右の車輪それぞれに約一八〇センチメートルの前挺子を噛み合わせることによって停止させられる。舞台柱の内側（だんぢりの内部）には、大太鼓、小太鼓、鉦が取り付けられ、担当者が乗り込んでだんぢり囃子を演奏する。舞台柱の周囲には赤い布と金の縄が飾り付けられる。また、だんぢりの後には、刺繍が施された幟旗が

資料1：だんぢりの構造

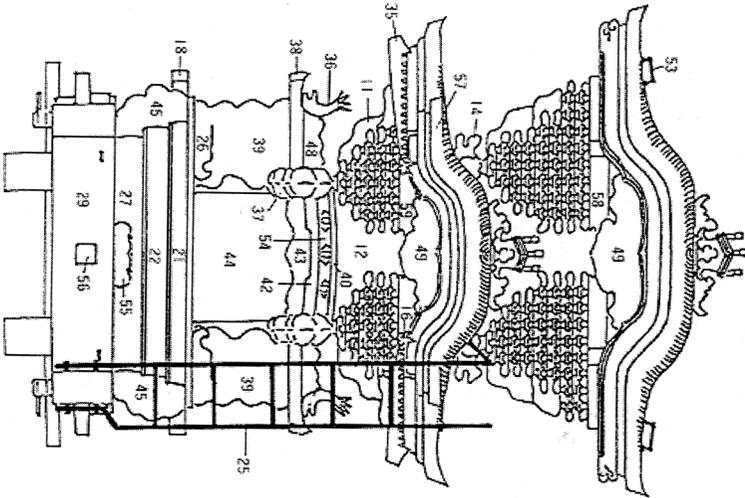
【正面】



【側面】



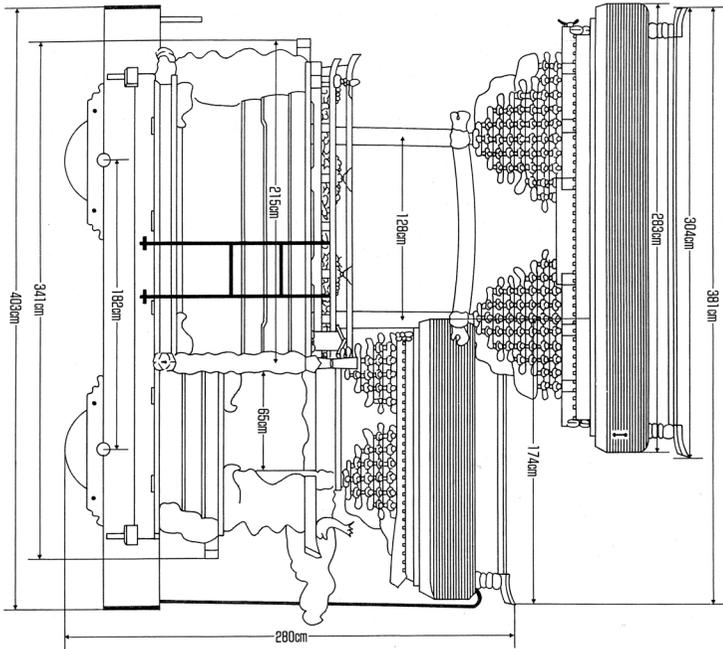
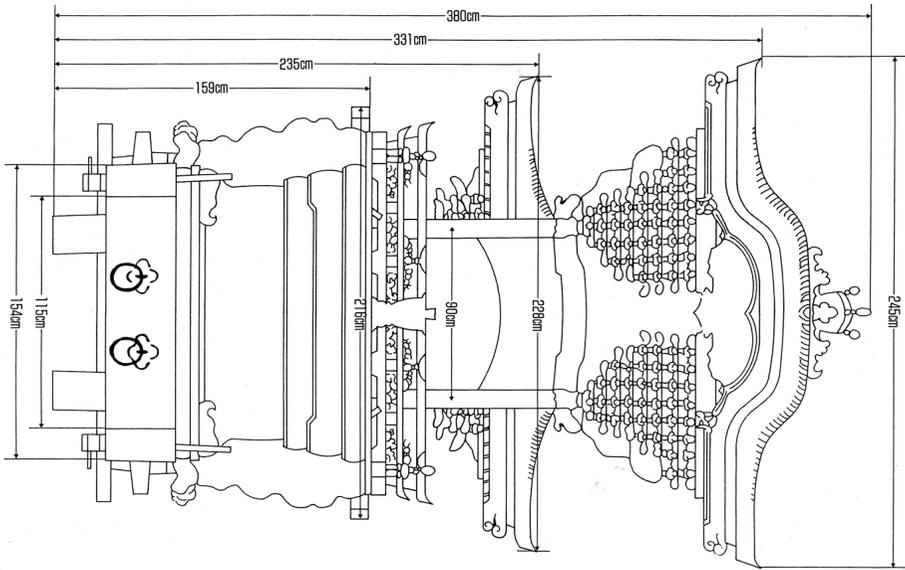
〔背面〕



だんぢり各部の名称

構造図番号	名称	読み	構造図番号	名称	読み
1	鳥金	トリガすま	31	腰板止構	よしかいたどめほう
2	鬼板	おにいた	32	松良受	まつらうけ
3	箱構	はこむね	33	車輪	ねこぎ
4	箕甲	みのこ	34	車輪	こま
5	置地	おきぢ	35	隈木	すみぎ
6	裏甲	うらごう	36	竹の節	
7	破風	はふ	37	摺出脚	すりだしばな
8	垂木	たると	38	大脚	かぶたけた
9	破風持桁	はふもち	39	大脚	おおわき
10	拵組	ますぐみ	40	台輪	たいわ
11	隅出す	すみだす	41	尾垂木	おたるぎ
12	拵合	ますあい	42	見送虹梁	みおくじりょう
13	虹梁	じりょう	43	見送下り	みおくさかり
14	木鼻	きはな	44	見送	みおくり
15	舞台柱(四本柱)	ぶたいはしら	45	半松良	はんまつら
16	桁隠し	けたかくし	46	脚障子	わきしぼし
17	高檣(勾欄)	こうじょう	47	重轆(心構)	しんりやく
18	縁隅木	えんすみぎ	48	物見	ものみ
19	松良	まつら	49	懸魚	けぎよ
20	土足敷縁札	とそくげんざん	50	地重番付構	ちくまはんごけりょう
21	縁廻	えんかづら	51	旗差金物	はたざりかまもの
22	子連子	おれんじ	52	奥綱纏	ひきつなかん
23	土呂構	ころんじ	53	手持金具	てもちかね
24	梯子	はしご	54	轆差	のまじり
25	犬丸欄	いぬまるん	55	轆台	のまじり
26	水板	みずいた	56	後榎子取付穴	うしろてとつけあな
27	榎子掛	えんこかけ	57	二軒重(腰破風)	にけんからしはぶ
28	台	たい	58	大屋根虹梁	おおやねじりょう
29	柄	ぼぞ	59	小屋根虹梁	こやねじりょう
30					

資料2：春木宮本町だんぢり寸法図



たてられる。だんぢりの寸法（大きさ）についてみると、だんぢりによって若干の違いがあるけれども、大きな違いではない。資料<sup>2</sup>には、春木宮本町のだんぢりの寸法図が示されている。春木宮本町のだんぢりは、平成三年にそれ以前に曳行されていた古いだんぢりに代わって新しく製作された、岸和田では比較的新しいだんぢりである。高さは三八〇センチメートル、長さは四〇三センチメートル、最大幅は二四五センチメートルで、平均的な寸法のだんぢりである。重量は約四トンある。（最大級のだんぢりで、高さ三九〇センチメートル、長さ四三〇センチメートル、最大幅二六〇センチメートル程度の寸法である。）大屋根の幅にくらべて、台やその内側に取り付けられた車輪の間の幅が小さいので不安定な構造になっている。これは曳行の際、道路の交差点において人が走る速さを保つたままだんぢりの方向転換をする「遣りまわし」を行いやすくするための構造であるといわれている。それぞれのだんぢりにおいて、もつとも工夫がこらされているところは、だんぢりの周囲に施された精巧な彫物（彫刻）である。彫物はそれぞれのだんぢりがもつ特徴のひとつでもある。彫物が描いている場面は、昔の武士の合戦の場面が多い。それもまた、だんぢり祭の勇壮な印象をつくり出す要素のひとつになっているといえよう。

## 四

実例として、春木宮本町のだんぢりの彫り物をみてみよう。（春木宮

本町のだんぢりの詳細は、『春木宮本町地車新調記念誌』を参照。）このだんぢりの特徴は、彫物が「源平物語」で統一されているところにある。主要部分の彫物は次のようになっている。

土呂幕（正面）「清盛怪異を見る」

平治の乱で討たれた悪源太義平の怨霊が、福原の殿舎で雪見をしている平清盛を襲う場面。恐ろしい形相をした源義平の怨霊とそれを見らみつける清盛を中心に彫られている。それらの周囲には、怨霊を恐れる武者たちや、多数の骸骨が描かれている。

土呂幕（左）「鬼神に勝る巴御前」

木曾義仲対源範頼、源義経の勢多の戦における巴御前の奮戦の様子。馬にのって戦う巴御前を中心に、巴御前の鎧を引きちぎった畠山重忠、今井兼平、内田家光らが描かれている。

土呂幕（右）「義経八艘飛」

壇ノ浦の海戦での源義経の八艘飛の場面。舟から舟へと飛び移る義経を中心に、それを追う平教経、鷲尾三郎、平知盛、武蔵坊弁慶らが描かれている。

大連子（正面）「紫宸殿戦」

平治の乱において、紫宸殿前で戦った平重盛と悪源太義平の一騎討

ちの様子。馬にのり戦う平重盛と悪源太義平が彫られている。

大連子(左)「八牧館夜討」

八牧の判官平兼隆を襲う源頼朝の様子。馬にのる源頼朝と平兼隆が描かれている。

大連子(右)「義家 貞任を討つ」

源頼義と八幡太郎義家らの軍が安部貞任らを鎮圧する栗屋川の戦の場面。馬にのる八幡太郎義家、安部貞任、荒川太郎光貞らが彫られている。

小連子(正面)「景清鍛引」

屋島の合戦における平景清と三保谷四郎の様子。三保谷四郎とその鍛を引きちぎる景清が彫られている。

小連子(左)「与一功名」

屋島の合戦において那須与一宗高が平家の舟上の扇を矢で射る場面。矢を放つ那須与一や源義経が彫られている。

小連子(右)「嗣信忠節」

佐藤嗣信が屋島の合戦において義経の身代わりになって討ち死にする場面。舟に乗った教経、落馬する嗣信、義経が彫られている。

縁葛(正面、左、右)「曾我十番切」

曾我十郎祐成、北条五郎時政兄弟が父の仇工藤祐経を追い、富士野巻狩において仇を討つ場面。祐成、祐経、時政兄弟、仁田四郎、御所五郎丸、和田義盛、本田次郎らが彫られている。

松良(左)「石橋山合戦」

石橋山の合戦で敗れ、洞穴に隠れた源頼朝一行を梶原景時が見逃して助ける場面。梶原景時、長尾信吾、真田与一、そして洞穴に隠れる源頼朝らが描かれている。

松良(右)「宇治橋合戦」

源三位頼政軍と平家軍の宇治橋での合戦の様子。頼政、源仲家、一来法師、筒井浄妙らが彫られている。

大屋根枡合(正面)「戦勝祈願」

鶴岡八幡宮に源頼朝が戦勝祈願に参る場面。馬にのった源頼朝が八幡宮の鳥居をくぐる様子が描かれている。

大屋根枡合(左)「弁慶仁王立」

源頼朝の兵に追われる義経を守るために武蔵坊弁慶がひとり戦い、立ったまま往生する場面が描かれている。

大屋根枡合（右）、「鞍馬山」

牛若が鞍馬山で修行を積む場面。烏天狗を相手に剣術の稽古をする牛若が描かれている。

小屋根枡合（正面）、「清盛落日を呼び戻す」

厳島神社。夕焼けがあまりにも美しいので、平清盛が扇で落日を呼び戻そうとする場面が彫られている。

小屋根枡合（左）、「五条大橋」

五条大橋で武蔵坊弁慶が牛若丸の太刀を奪おうとして襲いかかる場面が描かれている。

小屋根枡合（右）、「羅城門」

平安京羅城門における渡辺綱と鬼の戦いの場面が彫られている。

見送虹梁（正面、左、右）、「大江山酒吞童子退治」

源頼光は大江山の鬼といわれた酒吞童子の本拠地に、渡辺綱、坂田金時らとともに山伏姿に身をやつしてのりこみ、鬼に酒を飲ませて退治する様子が描かれている。

見送、大脇（左、右）、脇障子（左、右）、摺出受（左、右）、「一の谷の合戦」

一の谷で起きた源平の合戦の場面。彫物は、見送、大脇、脇障子、摺出受が一体となって合戦の有名な場面を描いている。見送の正面には、馬にのって戦う熊谷次郎直実と平敦盛が左右に彫られている。左横には梶原源太景季が、右横には馬にのって戦う平山武者所季重が、また奥には馬にのる武蔵坊弁慶がそれぞれ彫られている。左の大脇には、薩摩守忠度と岡部六弥太忠澄の組み合う場面が、右の大脇には源義経と伊勢三郎が彫られている。左の脇障子には馬にのって戦う梶原景時が、右の脇障子には平通盛が描かれている。摺出受は、左が鷲尾三郎、右が愛馬夕月を背負う畠山重忠が彫られている。また、見送の奥には合戦の舞台となった福原の城が、天井には龍がそれぞれ精巧に彫られている。

摺出鼻（左）、「常盤御前」

常盤御前が幼い牛若、乙若、牛若を連れて、雪の降りしきる山中を伏見から大和へと逃れる場面が描かれている。

摺出鼻（右）、「安宅関」

勸進帳の名場面。追われる源義経一行であることを隠すために、富樫の前で武蔵坊弁慶が義経を叩く様子が描かれている。

後縁葛（正面、左、右）、「富士野巻狩」

源頼朝が家来の士気を高めるために、富士の裾野で巻狩を行う様子

が描かれている。

後連子（正面、左、右）「源平時代の風俗」

餅つき風景、市場風景、大風に傘を飛ばす女など、当時の風俗が描かれている。

地車番付標「平家物語を語る琵琶法師」

平家の盛衰を語る琵琶法師が彫られている。

このように春木宮本町のだんぢりは彫物が源平物語になっているが、他のだんぢりの彫物をみるとそれ以外に、「難波戦記」、「川中島の戦」、「本能寺の変」、「太閤記」、「大阪夏の陣」、「関が原の合戦」、「赤穂義士討入」など、有名な合戦の場面が描かれている。

## 五

この彫物を彫刻するのは、地車彫刻師とよばれる専門の彫刻家である。春木宮本町のだんぢりの彫物は、主要な部分を岸田恭司とその弟子、片山晃、高浜輝夫が、その他の部分は松田武幸が彫刻した。彫物の製作には二年かかっている。また、だんぢりを最終的に完成させるのは、地車大工とよばれる宮大工である。地車大工は伝統的技術によって釘を使わずにだんぢりを組み立てていく。春木宮本町のだんぢり

は、植山良雄とその弟子、田中隆治が一年がかりで完成させた。だんぢり一台を新しくつくるのに三年かかるのである。新しくつくられただんぢりは、大きな事故を起こさないかぎり、六〇年から七〇年は曳行できるといわれている。ただし、一〇年から一五年ごとに傷んだ部分を中心に修理されることが多い。だんぢりが曳行されるのは、祭本番と試験引をあわせて年四日だけである。それ以外のときは各町会内にあるだんぢり小屋とよばれる倉庫にそのまま格納されている。

## 六

だんぢりを新しくつくるのにどれ程の費用がかかるのであろうか。実例として、資料3に春木宮本町がだんぢりをつくった際の地車新調会計報告書が示されている。それによると、だんぢり本体の購入費だけで六千五百万円がかかっている。それに太鼓や付属品、幟旗などの購入費を加えると、七、四五二万円かかることになる。この巨額な費用は町会の人々の寄付で賄われている。寄付をするかしないか、また寄付の金額をいくらにするかは自由である。春木宮本町の場合は百五件、合計六、一八八万円の寄付があったが、一件あたりの金額は平均約五九万円になる。

## 資料3

## 地車新調会計中間報告

春木宮本町地車新調委員会  
昭和63年11月1日～平成4年2月29日

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
寄附金入金	61,880,000	新調地車購入代	65,000,000
旧地車売却代	20,000,000	大太鼓購入代	2,520,000
旧大太鼓売却代	1,000,000	金縄、小太鼓購入代	2,500,000
旧金縄売却代	300,000	地車付属備品購入代	1,200,000
預金利息	433,813	地車小屋修理代	500,000
		幟、旗代	3,300,000
		入魂式諸費用	3,010,456
		その他	807,310
		平成4年2月29日現在残高	4,776,047
合計	83,613,813	合計	83,613,813

注:項目名の一部は筆者が修正した。

七

岸和田のだんぢり祭は、町会ごとに運営組織がつけられ、年齢層ごとに役割が決まっている。それは次のようなものである。

## 曳行責任者

だんぢりを曳くときの最高責任者。世話人の中から選ばれる。

## 世話人

五〇歳以上の人で構成される。各町会において祭の運営を全体的に取り仕切る。

## 若頭

三五歳から五〇歳の人で構成される。だんぢりを曳行する際に、曳行に関して全体的に取り仕切る。

## 拾伍人組

二五歳から三五歳の人で構成される。曳行の際、後挺子を担当する。

## 青年団

一五歳から二五歳の人で構成される。だんぢりの曳綱を担当し、曳行の中心になる。鳴り物(太鼓、鉦、横笛)も担当する。

## 子供会

一五歳以下の人で構成される。曳綱の先の方を曳く。

これらの名称や年齢構成は町会によっては異なるところもあるが、基本的にはどこも同じである。これ以外に、大工方（だんぢりの屋根に乗って進行の指示をだす担当者）、前梶子担当者（前梶子を操作する担当者）など、専門的な役割もある。

また、岸和田だんぢり祭全体を統括する組織として、「年番」がある。年番は享和三年（一八〇三）からある制度で、だんぢり祭全体の運営責任を負う。年番は各町会の世話人の中から選ばれた人が集まって構成される。祭に関して年番が決めることは絶対的な意味をもつ。同様に祭全体の組織として、若頭連絡協議会がある。若頭連絡協議会は各町会の若頭の中から選ばれた人によって構成され、年番と協力してだんぢりの曳行が安全に滑らかに行われるように祭を管理、運営する。

## 八

岸和田のだんぢり祭は九月に二日間行われるだけである。しかし、祭に關係する組織や人々は、そのために一年間を通して準備を進めていく。祭が終わりに、後片付けがすべて済む一二月頃には、各組織の役員は交代する。新しい役員のもとで各組織は次の祭に向けた活動を始める。一月から六月頃にかけては、月に一度は皆で集まり、祭に関する話し合いをする。時には親睦を深めるための行事も催される。前回の祭で不都合があれば、改善策を考える。だんぢり本体が破損した場合は、この期間に修理する。祭に必要なものは少しずつ整えていく。七月に

入ると、毎週一回集まって準備をすすめていく。組織ごとの集まりだけでなく、町会全体や岸和田だんぢり祭全体の会議も何度か開かれ、話し合いと準備を進めていく。八月になると、毎日夜に集まり、最終的な準備と曳行に関する話し合いが行われる。

だんぢり祭に関わるのはこれらの人々だけではない。高齢者は自分たちの組織で、祭を安全に楽しく見物できる所を設けるために、その準備と運営を行う。若頭や拾伍人組の役員たちは休憩所（詰所）で食事や飲み物の準備をする。同様に、青年団の役員も妻や母親も、詰所で食事と飲み物の準備を行う。（岸和田のだんぢり祭に関わる家庭の様子は、『きしわだのだんじりまつり』にわかりやすく描かれている。）こうして、数多くの人の努力によって、そして多くの人に支えられながら、岸和田だんぢり祭は長い伝統と繁栄を誇っているのである。

### 参考文献

- 岸和田市史編纂委員会編『岸和田市史』第三巻近世編、岸和田市、二〇〇〇年。
- 岸和田市史編纂委員会編『岸和田市史』第五巻現代編、岸和田市、一九七七年。
- 桧本多加三『だんじり岸和田』堺泉州出版会、二〇〇一年。
- 川浦良三・柿花芳男編、石田信博著『春木宮本町地車新調記念誌』春木宮本町世話人会、一九九三年。
- なかむらしょうこう作、さいとうしのぶ絵『きしわだのだんじりまつり』リール、一九九九年。
- 毛利一郎『地車研究』第一輯、第六輯、地車研究会、一九七四年～一九八三年。
- 若松均『摂河泉だんぢり談義』地車工匠編、一九八三年。
- 若松均『摂河泉だんぢり談義』地車紹介編、一九八三年。
- 岸和田市ホームページ <http://www.city.kishiwada.osaka.jp>